

## 「ゼッケル文庫」に見る 16 世紀の金属活字版印刷術の様相 2

### ヨハン・フローベンとバーゼルの印刷所

只野 俊裕

#### はじめに

活版印刷が発明され、揺籃期を経て産業として成長を見せる 16 世紀、この新技術に注目し活用した人物の一人に、デシデリウス・エラスムス (Desiderius Erasmus Roterodamus, 1466-1536) がいます。彼は、自身の作品の成功の可否に、印刷業者が果たす役割が大きいことを知り、印刷の生産工程に関心を持ち、優秀な印刷者を探し、作業に参画し、正確で美しい本を作ることに力を注ぎました。1503 年に『エンキリディオン (キリスト教戦士の手引き)』をルーヴァンのティエリー・マルテンスのもとで出版します。1506 年にはイタリアのアルド・マヌーツィオ (アルドゥス・マヌティウス) と知り合います。アルド・マヌーツィオは印刷術の草創期の巨人であり、その印刷術の評価は高く、盤石の地位を築いていました。ここで自著を出版し協働したことにより、エラスムスは他の印刷業者を評価する目を養ったといえるでしょう。1511 年に『痴愚神礼賛』をパリで出版し、1514 年にはバーゼルのヨハン・フローベン (Johann Froben, 1460-1527) を訪ねています。エラスムスは、校訂済みのギリシア語本文に、注釈とともにラテン語の訳文を付けた『新約聖書』をアルドのもとで出版しようと考えていたようですが、1515 年にアルド・マヌーツィオの訃報を受け、フローベンにこの出版を許可し、1516 年に出版します。この成功により、エラスムスとフローベンの間に信頼関係が成立したといわれます。

フローベンは、1491 年 (か、それより前) に印刷所を設立しました。一般的には、1514 年以降のエラスムスとの親交により記憶されています。エラスムスはフローベンと協働し、書物の多くをフローベン印刷工

房で印刷しています。これはフローベン工房にとって偉大な時期でした。と同時にバーゼルの多くの優秀な印刷者たちにも、大きな影響を与えました。その印刷者の中には、将来ルターのために印刷をすることとなるヨハネス・オポリヌス (Johannes Oporinus), そしてフローベン工房と共に歩むことになるエписコピウス (Episcopus) 一族などがいました。

この時期、フローベンによって先導されたバーゼルにおける印刷は、豊かな実りを見せます。堂々として黒味の強いオールドスタイルのローマン体活字は、優美なイタリック体、見る人を楽しませるイニシャルレターと調和し、品位ある組版様式の本を作り上げています (写真 1-1, 1-2)。この時期にバーゼルで作られた本は、さらに内容に適した木版画、スペーシングされた大文字の見出しによる区分など、大変堅固な組版、配置に対する確かなタイポグラフィーの特性により、高く評価されています。

ゼッケル文庫の中には 1563 年から 1588 年までにバーゼルで製作された書籍が、6 タイトル 13 冊所蔵されています。ヨハン・フローベン自身による印刷本はありませんが、彼の没後 36 年にわたり、その衣鉢を継いだ印刷者たちの名前を見ることができます。本稿では、この 6 タイトルに、フローベン工房とバーゼルの印刷所の活版印刷の変遷をたどります。そして、評価の高い組版の要素であるオールド・ローマン体、イタリック体、イニシャル、図版などから、活版印刷の草創期を超えて印刷業を営む、実務者としての印刷者たちの取り組みを見ることにします。

#### 1. 扉またはプリンターズマーク

写本の時代には本文の冒頭はインキピット (Incipit)

という言葉で始まるのが一般的で、この習慣は活版

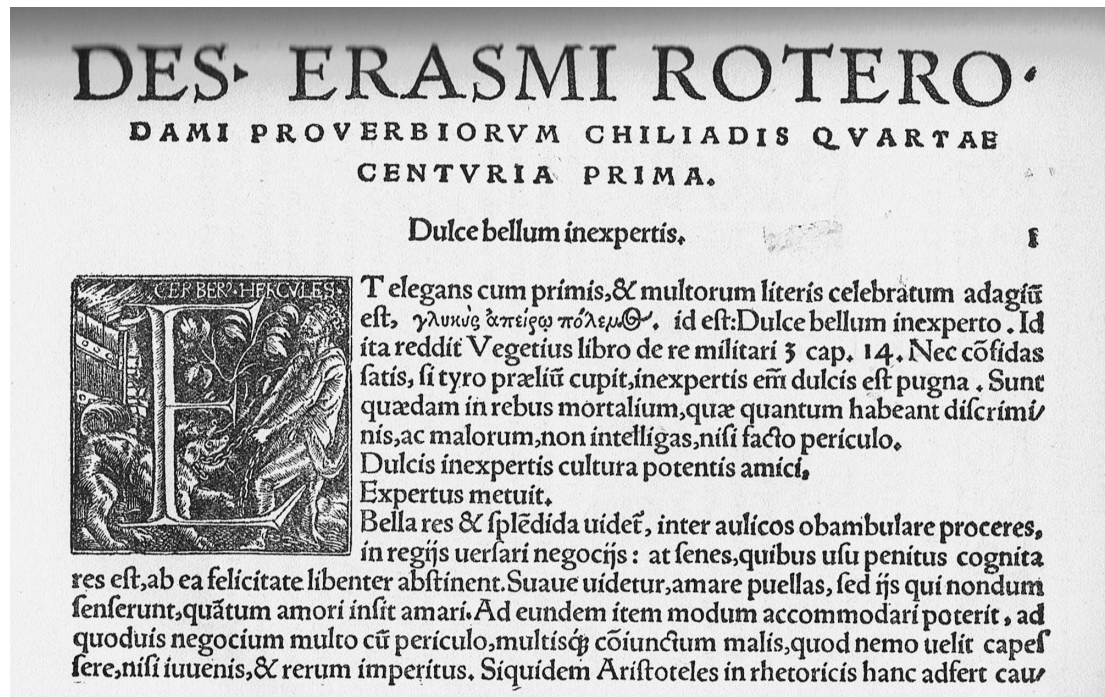


写真 1-1 フローベンのローマン体 (出典: Updike, Daniel Berkeley, *Printing types, their history, forms, and use; a study in survivals*, Cambridge, 1922)

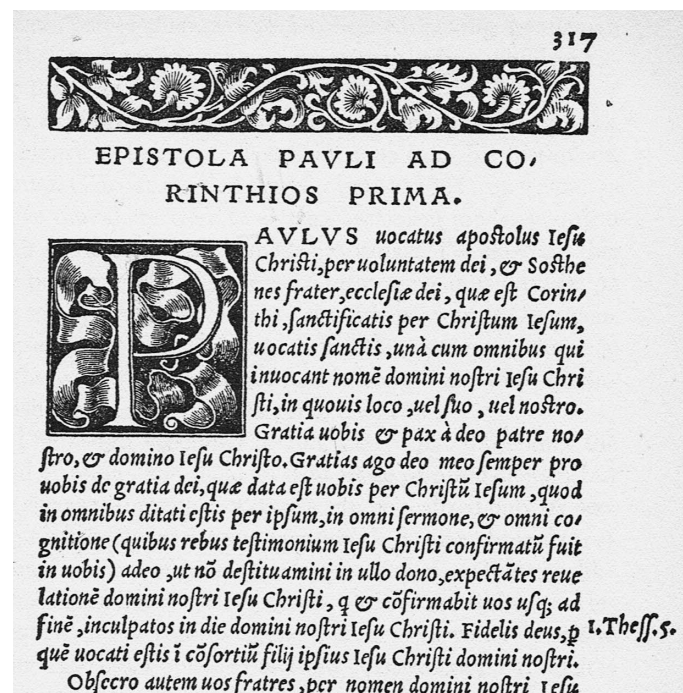


写真 1-2 フローベンのイタリク体 (出典: 写真 1-1 と同じ)

印刷の初期にも踏襲されていましたが、しばらくすると印刷本の工夫の一つとして、本文の前に扉が置かれるようになります（書誌学では「標題紙」と呼称します）。ここには本の題名、著者名、プリンターズマーク（printer's mark, または printer's device）と発行所、発行年などの書誌情報が掲載されることになりました。本稿で取り上げる、バーゼルで出版された6タイトルの扉、プリンターズマーク、奥付（imprint）などを年代順に一覧してみます（写真2）。

フローベンのプリンターズマークは①と④です。カドゥケウス（ヘルメスの杖）を掲げる構図が印象的です。1563年の印刷本（①）は「フローベンとエписコピウス」（FROBENIVM ET EPISCOPIVM）と二人の連名になっています。その10年後のフローベン工房の印刷本（④）には、「フローベンの兄弟アンブロシウスとアウレリウス」（APVD AMBROSIVM ET AVRELIVM FROBENIOS FRATRES）と兄弟二人の連名になっています。一方、②と⑤はフローベン工房ではありませんが、同一の印刷所によるものです。扉の構図は同類であり、②には出版者として IOAN. HERVAGIVM, ⑤には EX OFFICINA HERVAGIANA, PER EVSE-bivm

Episcopivm とあります。⑤の巻末にカドゥケウスを掲げる構図を引き継いだプリンターズマーク（⑧）があり、フローベンにつながる印刷所と考えることができます。③はエписコピウス一族の印刷所です。最後の頁にカドゥケウスを掲げる構図が引き継がれたプリンターズマークが置かれています（⑨）。⑥は同じくエписコピウスの印刷所です。

ヨハン・フローベンの長男ヒエロニムス・フローベン（Hieronymus Froben, 1501-1563）は、義理の兄弟ニコラウス・エписコピウス（Nikolaus Episcopus）とともに、バーゼルの印刷業に寄与します。後継者はエウセビウスとニコラウス（小）であり、さらにその息子アンブロシウスとアウレリウスを経て、一族は印刷業の発展に貢献することになります。また、ヘルヴァギアーナ工房（OFFICINA HERVAGIANA）とはヨハン・ヘルヴァーゲン（Johann Herwagen, 1497-1558?）により設立され、彼は上記のニコラウスと義理の兄弟であったとされていますが、「PER EVSE-bivm Episcopivm」という表記から、少なくともエウセビウス・エписコピウスとの協力関係は明らかでしょう。いずれにしてもゼッケルが収集したこれらの書籍は、すべてフローベンにゆかりのある印刷所で製作されたものであったのです。

## 2. オールド・ローマン体

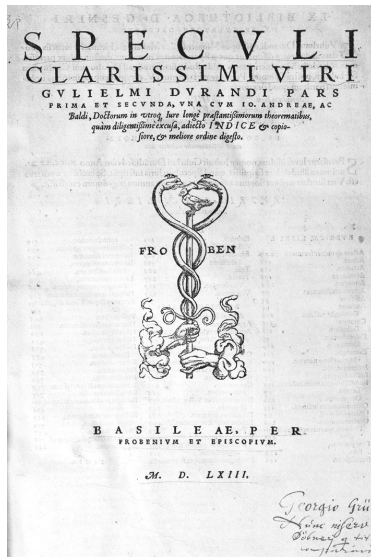
バーゼルにおけるフローベンの印刷業に対する貢献は、ローマン体をはじめとして、イタリック体とギリシア語の活字などを導入普及させたことです。「はじめに」で「堂々として黒味の強いオールドスタイルのローマン体活字は、優美なイタリック体、見る人を楽しませるイニシャルレターと調和し」と述べましたが、フローベン工房のラテンアルファベットのうちから、1526年（写真1-1）と1563年のゼッケル VI, D 2-1 38（写真3）と1573年のゼッケル VI, D 2-1 45（写真4）のローマン体の変遷をたどってみます。ここに f, a, e, i, o, p を取り上げて、骨格としての「字体」と、様式としての「書体」を比較してみます（図1）。図1には参考として、ゼッケル文庫に見る活字の他に、アルダス（アルド・マヌーツィオ）とクロード・ギャラモンの活字を併載しました。

1526年を見ると、eのバーの傾き、iの点の位置、oのアクシスが大きく傾いているなど、ヴェネチアン・

ローマン体の特徴が色濃く示されています。1563年の e, i はヴェネチアン・ローマン体の特徴がみられますが、o はオールド・ローマン体の特徴がみられます。これは単なる組版上の混在なのか、オールド・ローマン体に完全に移行する過渡期の姿なのかは判然としません。1573年は、eのバーが平行、oのアクシスの傾き、iの点の位置からオールド・ローマン体に分類されます。1526年と1563年は似ています。pのアセンダーが、アルダスのpより短いですが、その影響下にある書体と見ることができます。1573年は、1526年と1563年とは別書体だと分かります。こちらは、ウエイトの違いはありますが、ギャラモン系のオールド・ローマン体と考えられます。時代ごとに、ディセンダー・ラインが少し長くなり、フォルムが段々と整えられてきているのがわかります。

書体は、その時々で新しいものが創作されます。人気がない書体は姿を消してしまいます。また、一つの

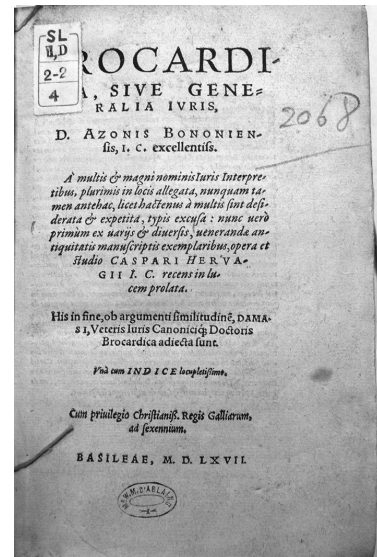




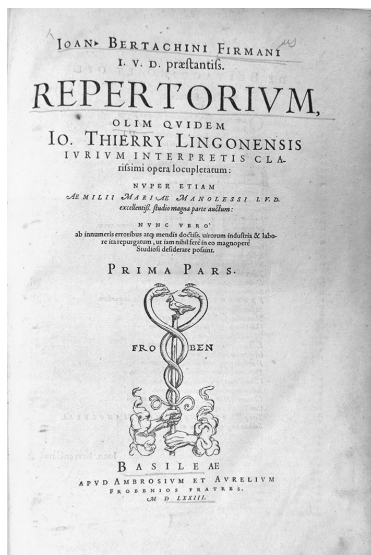
①



②



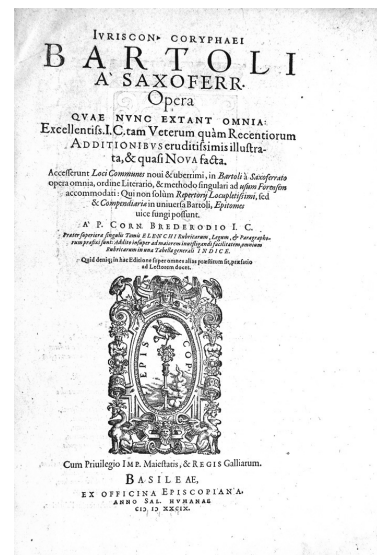
③



④



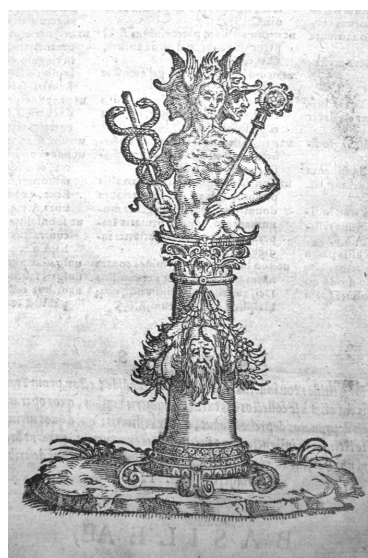
⑤



⑥



⑦フロベ



⑧ヘルヴァギアーナ



⑨エビスコピウス

写真2 ゼッケル文庫に見ることができるパーズルで出版された6タイトルの扉



nè remittit, tamen, prout potest, instructum, s. quia dicit,  
quomodo citauit partes, & quomodo obtulit se paratū  
ad procedendum, & quomodo actor procedere noluit:  
& etiam si expedierit, dicet, quomodo dedit reo potesta-  
tem dicendi quicquid uellet: & sic de alijs factis uel omis-  
sis. Sed contra: quia non ualet remissio, nisi plena: imò  
puniendus est iudex contrā faciēs, ut C. de relat. nec cau-  
fas. C. de legi. l. ij. & l. humanum. & extra de elec. dudum. j.  
§. cū autem. Sed dic illud uerum esse quando fieri potest:  
& est quod iudici ualeat imputari: aliàs autem sufficit fa-

写真3 ゼッケルVI, D 2-1 38 のローマン体 (1563 年)

lis dicere, quòd ille text. loquatur quādo cōmittitur nudum  
ministerium sine iurisdictione: ut in §. ceterum. d. c. fi. Secus  
autem, ubi comittitur negotium cum causæ cognitione:  
quia tunc quantumcunq; sit arduum, non uidetur tūc papa  
eligere industriam personæ, nisi exprimat expressè, uel taci-  
tè, secundum Abb. in d. §. is autem. Item uidetur electa indu-  
stria personæ, secundum Innoc. quando negotium commis-  
sum est magnū: secus, si paruum, quia licet tunc dicatur per-  
sonaliter exequaris, nihilominus potest alteri subdelegare  
uices suas, nisi sit dictum, Confidentes de industria tua. Et

写真4 ゼッケルVI, D 2-1 45 のローマン体 (1573 年)

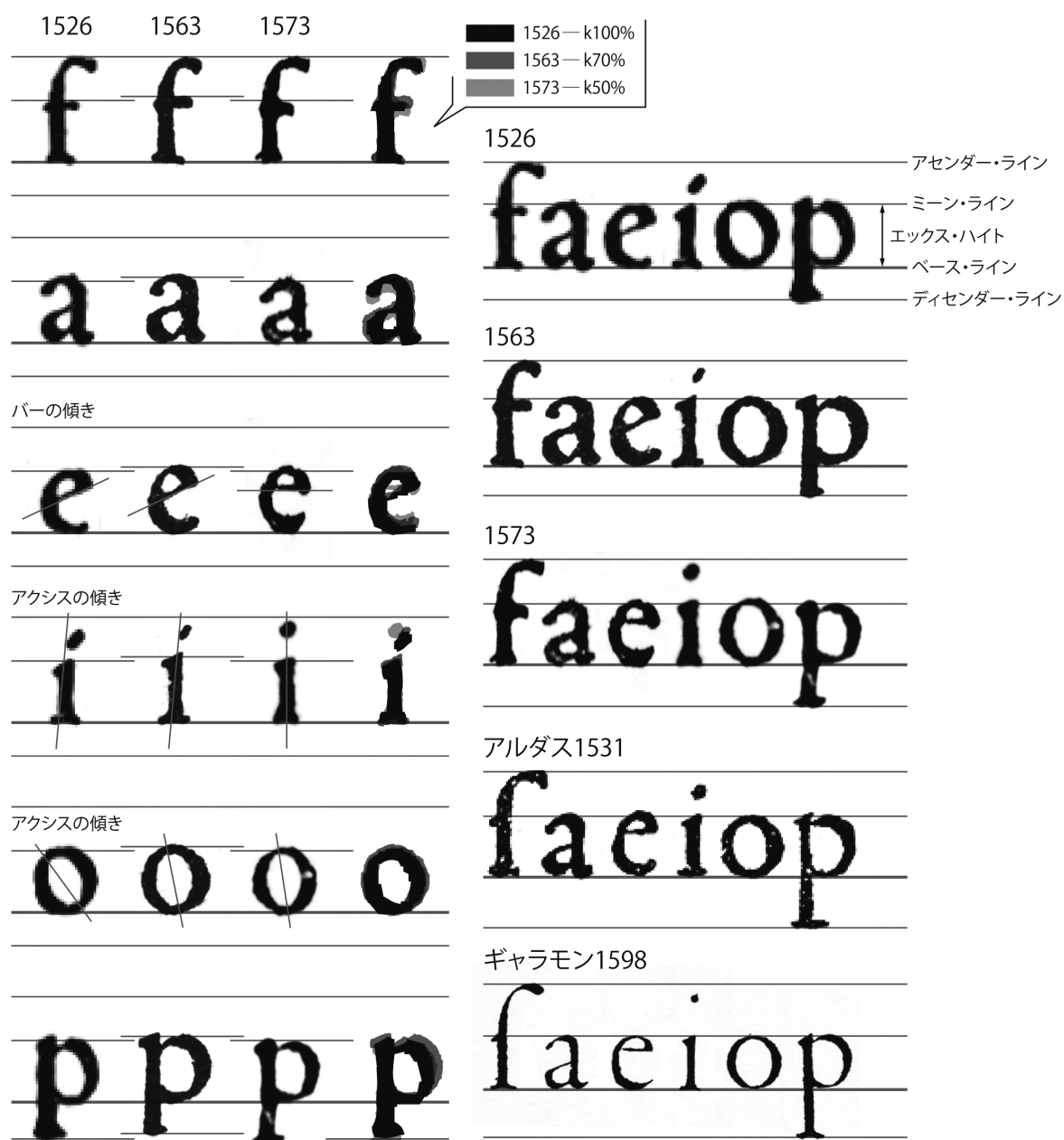


図1 フローベン印刷工房における 1526 年, 1563 年, 1573 年のローマン体の比較

1. Huic colligendi studio non Latini modo,  
 lentiarum genere: quorum Lucubrationib;  
 modis ornata & alleuata sunt. Exemplis  
 de bibliothecam extare, quæ non præsent  
 dum ueterem illum iuris Coryphæum, Alb  
 nnem Oldendorpium, & ueteres multos &  
 è. Quorum exemplis manifestè satis docet  
 lium cōmittendum esse: eoq; minus met  
 autilia, pro usitatis obsoleta, pro cognitis in  
 congesta turpissimè & sine methodo cōfur

写真5 ゼッケルVI,D 2-1 20に見る活字書体の混在(丸印で囲った活字)

書体がその時代が求める形に改刻されて引き継がれることもあります。1563年から1573年の10年の間に、フローベン工房にとって、バーゼルの印刷を牽引してきたオールド・ローマン体を捨て、新たなオールド・ローマン体を導入する契機があったのかもしれません。

もう一つ、エписコピウスの1588年に刊行された、5分冊の本(『バルトルス全集』)を見ることにします。このタイトルは印刷も美しく、後で述べるイタリック体も美しく、魅力的な点を多く見つけることができます。例えば、組版には図版が多用されていますが、その木版画が構成する線は美しく、版面に的確に配置されています。第5巻の後ろ見返し付近に、大判(Y810

×T519)のインデックス一覧表が足を付けて糸で綴じ込まれています。さらにはウォーターマークの入った用紙を見ることができます。

しかし、この魅力的なシリーズ本も、本文の活字を追っていくと意外なことに気づきます。二種類の活字が混在して(a, i, e, アンパサントなど)使われているのです(写真5)。これは現代では、意図的な強調などを除けば考えられないことです。

ゼッケル文庫の調査では、約400年前の印刷所の中で働く印刷工がどんな思いでそれぞれの印刷工程に関わっていたのかと、いつも思いながら版面を眺めますが、この混在の頻度は不思議に思えます。

### 3. イタリック体

イタリック体はヴェネチアのアルド・マヌーツィオにより創作され、当時の印刷界において活用されました。一方、フローベンのイタリックは、バーゼルイタリックと呼称され、周辺の印刷所に大きな影響を与えました。アルドのイタリック体の大文字は斜形のものではなく立体でしたが、フローベンのイタリックの特徴は、大文字も斜形のフォームであったことです。写真1-2の

大文字はまだ立体です。ここに紹介する1563年の本文の大文字も立体ですが(写真6)、標題紙の見出しには斜形の大文字が使われています(写真7)。これらはヨハン・フローベンのオリジナルの形からは変化しているようです。手漉き紙に印刷されたイタリック体の版面は、息をのむような美を感じさせるものです。



An. q. j. huius tituli, an ualeat rescriptum impetratum per conuentum, de abbate mentione non facta. Allegat quod sic. l. j. C. de diuer. rescript. ubi rescriptum prodest fratri impetranti. Si hoc in carnali fraternitate, fortius in spirituali. de transla. ca. ij. Facit quod ex sola affectione dicitur quis frater. ff. de hæ. insti. l. nemo dubitat. Alle. etiã extra, de iudi. causam. In contrarium alle. ff. de min. l. deniq; §. sed utrũ. ubi restitutio datur filio, non patri. unde cum patrem contingeret, non datur. Ad idem eo. titu. quod si minor. §. si seruus inducit etiam l. ait prætor. ff. de iur. deli. ubi. qui non potest alienare, & c. distinguūt ut si bona sint communia, ualeat per præ. l. j. Nec obstat. l. deniq; quia restitutio minoris est beneficium persona=

写真6 ゼッケルVI,D 2-1 38の本文のイタリック体

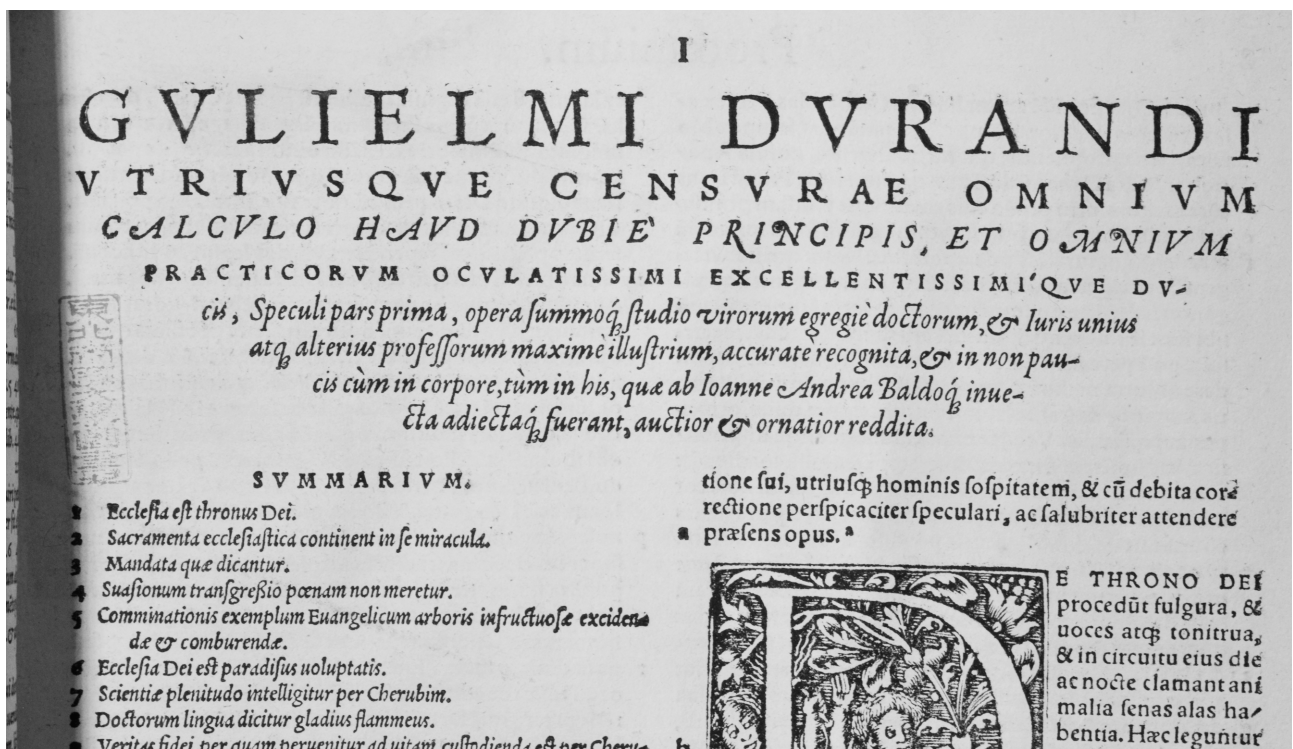


写真7 ゼッケルVI,D 2-1 38の標題紙のイタリック体

#### 4. イニシャル

バーゼルのヘルヴァーゲン工房で印刷された1564年本(『ローマ法事典』)は、AからZまでのイニシャルを使用しています。その一覧を掲載します(写真8)。前号では、文字のみのイニシャルの出自を求めた試論を問いましたが、ここで取り上げる1564年本のイニシャルは、その背景に絵画文様を配しています。人物紋、動物紋、草植紋の三種を見ることができますが、

これらは特にテーマを分別する、あるいは統一感を持たせるための、意図した使い方には見えません。単純に冒頭装飾大文字の役目を果たしているようです。

第二は、印刷の鮮明さにバラつきがあることです。新しく補充された文字活字と、従来から使い古された文字とでは、印刷される鮮明さが違ってきますし、印刷紙に対する印圧なども、その要因となります。

#### おわりに

本稿では、ゼッケル文庫に所蔵される6タイトルから、エラスムスとの協働によってバーゼル印刷業の中心的存在となったフローベン印刷工房と、その周辺の印刷所による書籍の活字および組版の特徴を探り、変遷をたどることで、これらの書籍がすべてヨハン・フローベンの継承関係にある工房によるものであったこと、1563年から1573年までの10年の間に、フローベン印刷工房で使用するオールド・ローマン体に大きな変化があったこと、そして、イタリック体にはそれより前に変化が訪れていたことなどが明らかになりました。その変化にはおそらく、親から子へ、子から孫へという代替わりのタイミングが関係していたのかもしれませんが。それと同時に、フローベンを継承する周辺の印刷所との相互の影響も興味深いところです。

16世紀のバーゼルは、学術出版の一大拠点として台頭しました。ヨーロッパの人と物の移動における結節点にあり、書物見本市(現在まで続く国際ブックフェア)の街フランクフルト、南フランスのモンペリエ大学、また、イタリア各地の大学と北部ヨーロッパの知的世界を繋ぎあわせる場所でもありました。エラスムスの活躍と併行するフローベンの印刷業、それに続く印刷者たちの活躍は学術書の専門市場の形成に大いに貢献しました。印刷本における図版の役割を飛躍的に増大

させ、自然科学書や探検記などの生産に影響を与えたのもバーゼルでした。

また、16世紀は宗教改革の時代でもあります。1517年にマルティン・ルターが95箇条の提題を公開することに端を発し、宗教改革運動がヨーロッパを席卷します。印刷業界もこれに乗じて活躍し、その所在地は印刷都市として発展するところもありました。バーゼルの印刷業もこの運動と多くの関わりを持ちました。印刷者たちはローマン体、イタリック体、イニシャル、図版などを駆使した組版が社会を動かすことにどんな思いを抱いていたのか、当時の職人たちに聞いてみたい思いが強くなります。

さらに、この時期には現代の書体の中でも人気のある、クロード・ギャラモン(1500?-1561)、そしてロベール・グランジョン(1513-1589)が活躍した時期とも重なります。二人の作品がバーゼルに影響を与えたか否か、その検証は今後の課題とします。

本報告を作成するにあたり、小川知幸氏(東北大学総合学術博物館助教)に多くのご教示を賜りましたことを記して感謝します。

(ただの としひろ、東北大学附属図書館協力研究員)





写真8 ゼッケルVI,D 2-1 69 に見るイニシャル一覧

### 本論で紹介したゼッケル文庫

(ゼッケル VI,D 2-1 20, 1588) Baltolus, Opera omnia, Basileae, 1589. 5 v.

(ゼッケル VI,D 2-1 38, 1563) Durandus, Gulielmus, Speculi clarissimi iuri, Basileae, 1563.

(ゼッケル VI,D 2-1 45, 1573) Firmanus, Ioan Bertachinus, Repertorium, Basileae, 1573. 4 v.

(ゼッケル VI,D 2-1 69, 1564) Spiegelius, Jac., Lexicon iuris civilis, Basileae, 1564.

(ゼッケル VI,D 2-2 4, 1567) Azonis Bononiensis, Brocardica, sive generalia juris. Basileae, 1567.

(ゼッケル VI,D 2-7 9, 1577) Spiegelius, Jac., Lexicon iuris civilis, Basileae, 1577.

### 参考文献

ヨハン・ホイジンガ『エラスムス・宗教改革の時代』(筑摩書房 1965)

Updike, Daniel Berkeley, *Printing Types, their history, forms, and use; a study in survivals*, Cambridge, 1922.

白井敬尚『欧文書体百花事典 書字から印刷用活字へーイタリック体の成立』(朗文堂 2003)

小林章『欧文書体ーその背景と使い方』(美術出版社 2005)

河野三男『ローマン体の歴史ー活字山脈の主峰』(私家版)  
アンドルー・ペティグリー 桑木野幸司訳『印刷という革命ールネサンスの本と日常生活』(白水社 2015)